椙山女学園大学教育学部紀要（*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*）**15**（1）：211–216（2022）

実践報告（***Report***）

大陸間 SDGs 教育実践の多様なメソッドと可視化による展望

── Educational Visualization System と SDGs の視点から ──

Various methods of Intercontinental SDGs education and Perspective through visualizational interface: From the Case of Educational Visualization System and SDGs

宇土泰寛[1]・林　敏博[2]・デュマバン フレデリック[3]・上田敏博[4]

Uto Yasuhiro[1], Hayasi Toshihiro[2], Dumabin Frederic[3], Ueda Tosihiro[4]

はじめに

大陸間 SDGs 教育プロジェクトは，ESD，MDGs（ミレニアム開発目標）と関わりながら，SDGs の誕生以前から水問題プロジェクトとして取り組んできた。現在，テレビをはじめ，様々なメディアを通じて SDGs が広まってきている。それは，各地方自治体などの行政機関の取り組み，民間企業の取り組みなどが急速に広まっており，学校教育の取り組みが追い越されようとしているのを実感する。

そこで，学校教育にとって，社会への参画，行動重視，世界とのつながりを強化する必要があり，「伝達志向型（transmissive）」から「変容志向型（transformative）」へのパラダイム転換，多様なメソッドの開発，そして，今後の展望へ向けて活動の可視化を図り，持続可能な活動への理論と今後の展開への課題を見出していくことが重要であると考える。

1. 大陸間 SDGs 教育実践の歩みと活動コンテンツの変化

水問題から始まった大陸間教育プロジェクト活動の2008年～2021年の経過を振り返ってみる。

⑴　モノの直接支援（第１ステージ）

ブルキナファソと最初につながったのは，2008–2009年の東京白金の地域活動による文房具支援であった。地域の商店街と子どもたちが一体となって実施した活動である。この東京での活動を，愛知で2010年から継続したのが，椙山女学園大学附属小学校であり，学校の机といすを商船三井や大使館の協力を得てブルキナファソへ送ったのである。このステージでの活動はモノを直接贈り，開発途上国を支援するものであった。

⑵　直接支援から間接支援の教育開発重視へ（第２ステージ）

ブルキナファソとの交流を深める中で，現地の水問題を知るために，2012–2013年に現地を訪問した。そこの現地事情から，一つの村に井戸掘を支援するだけではなく，教育を通した持続可能な村づくりと日本側は，現地理解を通して，支援への意識変革につながる国際教育重視の方向へと転換することにした。

そこで，課題になるのがコミュニケーションであり，言語コードを逓減する方法を探究した。音楽やジオラマなどを取り入れた理由であり，水を共通テーマに各国の課題を出し合い，学校で研究開発を行った。

その結果，2015年に３ヶ国の「I LOVE WATER」合唱，2016年に日本とブルキナファソ合同の大陸間ミュージカル「I LOVE WATER　人と水の精の物語」を日本で実施した。同時に，地域の団地と連携した持続可能なまちづくりをジオラマで実施（2015–2018年），企業と大学（宇土ゼミ）が連携した小学校への出前授業（2017–2019年），そして，2019年３月にパリ日本文化会館で地球子ども広場での大陸を越えた学び合いと公演を行い，日本，フランス，ブルキナファソの子どもたちが「パリ子ども宣言」を創ったのである。

⑶　活動コンテンツの拡大とオンラインによる教育と行動の重視へ（第３ステージ）

「パリ子ども宣言」を世界に広げるために，新たな国との交流を開始し，さらに，SDGs の一般への広がり，気候危機での世界的運動，コロナ禍でのオンラインの日常化などを通して，活動コンテンツを教育・環境・経済への拡大と市民参加・行動の重視へと移行することになった。2020–2021年には，日本とフィリピンによる国際 Zoom 会議を毎月開催し，フィリピンでもジオラマ・音楽プロジェクトを開始，日本では，「ジオラマワンダールーム」として，年少者用と高学年用ジオラマのオンライン化を図り，「年少者用宇宙船地球号プログラム」の制作を進めてきた。

[1] 椙山女学園大学名誉教授，[2] 名古屋市立大学，[3] 椙山女学園大学附属小学校クリプトメリアンセミナーフランス語講師，[4] NGO RISEASIA Acting Director

2021年12月20日受付

2. 大陸間支援交流活動の課題とパラダイム転換

⑴　支援交流における支援する側と支援される側

①　モノの直接支援の視点への問い直し

世界の経済と産業の開発が遅れた途上国では，8 割以上の人々が貧困に苦しんでいる。貧困は，深刻な社会問題である。これらの問題解決に向け，国際協力によって途上国の課題を解決することに関心が寄せられる。政府機関，国際機関や NGO などの組織は，貧困層の人々の開発のための支援を実施している。先進国が途上国に一方的に支援をしても，うまく活用されていない例が挙げられる。支援して欲しいのは「モノ」ではなく人材や教育といった「ヒト」や「コト」の場合もあるため，何をどのように支援するか重要である。先進国からの支援は，条件をつけて行われることが多く，それが途上国側の負担になることは望ましいことではない。

②　現地で求められるモノ

途上国では，社会格差，産業不足，人材の国外流出といった経済の問題もあり，生活に困窮している人々へ痛ましいと善意で支援を促進することが色濃かった。一時的なその場しのぎの解決ではなく，その人々が自らの生き方と社会の在り方を思索し，エンパワーメントの機会を増やし，支援することが望まれる。貧困をなくすために，途上国がどうしたら経済的に自立できるか，それに対して先進国がどう関わっていくのか。途上国の多くは，先進国に対して，無条件の援助に依存率が高い。先進国は，世界の貧困をなくすために援助したと，活動そのものは世界の目を貧困削減に向かせる情報政策としては良いが，援助ばかりをして援助浸けにしたら，途上国はいつまでたっても持続的な経済開発が図れないことになる。経済的に途上国が自立するための支援として，人間として生きるための基本的なニーズを満たすことを最優先としており，水，衛生，基礎教育，社会保障といった基本的公共サービスの充実をめざすものである。効果的な変革を達成するアプローチとして，貧困層の衣食住など生活上の基本的個人消費と，社会の最貧層の生活状態を引き上げることが，途上国の開発を底上げすることにつながっている。途上国で支援する際は，先進国の支援する側が主体となって，途上国の地域住民が事業を行うといった一般的な開発の考え方とは異なり，支援される側の自発的な行動によって事業をすることが理想である。途上国の地域住民が事業の主体となることの重要性を提唱している。支援事業を実施する国と地域の的確な情報を入手し，現地の優秀な人材を取込み，現地パートナーを見つけ，事業地となる地域住民とコミュニケーションによって相互理解し尊重し，コンセンサスを行う。そして，信頼関係を築き，何が必要とされているかを見極めることが重要である。ターゲット層とする地域のニーズを徹底的に分析・検討し，事業計画を立て，地域の課題解決に向け事業を実現可能なものにすることが望ましい。様々な課題が解決し，持続可能な未来を築くことができる。

③　支援する側と支援される側の持続性

NGO による支援事業では，主体となる途上国の地域住民が肝要であり，政府機関や国際機関による支援事業では，多くの場合，支援される側の政府機関をカウンターパートとすることができるため，持続的な事業の可能性は高いが，NGO の場合，主なカウンターパートは現地 NGO か地域住民組織であることが一般的で，それらの NGO は，支援事業が完了すれば，新たな支援金を求めて他の地域や別のスキームに変更しなければならず，持続的な支援金を得ることは非常に困難である。支援事業の効果を持続させるためには，課題のターゲット層である地域住民を旗手として教育することが不可欠であり，理解を決意に変え，継続的な行動により組織文化を育むこととスキルを伸ばすことが求められる。地域住民のエンパワーメントとキャパシティビルディングを支援事業期間中に実現できなければ，スポンサー資金の完了が活動の完了となる。支援事業が完了とならないよう継続的に，住民主体やエンパワーメントを実現に結びつけるための仕組みづくりを計画し，支援事業を実現可能にすることが重要である。

⑵　支援交流における学校の課題と変化

①　相互交流における自国理解と表現・発信

グローバル化，多文化化が進み，学校現場で国際理解教育の重要性は理解されていても，その実践が継続・発展していかない原因はどこにあるのか。その理由を考えてみると，担当している先生の移動やそこにかかわっている団体，協力者との継続した関係の維持が難しかったり，教育課題の変化によって学校の教育方針が変更されて継続して活動に取り組めなくなったりしてしまい，一過性のイベントで終わることなどが考えられる。また，義務教育年齢の子どもたちが直接または間接にしろ，言語の違いを乗り越えて互いにコミュニケーションを取り合うことが難しいことも原因の一つとなっている。このような交流では，望ましい資質・態度を育成することはできないが，新学習指導要領において持続可能な社会の担い手づくりが求められている中，世界の現状を知るだけの学習にとどまるのではなく，その解決に向けて行動に結び付けるような教育活動の実践が重要となってきている。そこで，これからの国際理解教育における望ましい交流活動の在り方を考えていきたい。

SDGs のような地球的課題の解決に向けて，自分たちに何ができるのかを考える学習をする際に大切なことは，その課題を他人事としてとらえるのではなく自分事ととらえることができるような活動にしていくことである。これまで，「知る」，「考える」，「行動する」といった流れで行われてきた国際理解教育では，「知る」段階において，世界の現状についてインターネットや本を使っての調べ学習が中心で，自分で体験して感じたことというよりはどちらかというと，書かれ

ているものを一方的に受け入れ，それをまとめて終わるといったパターンになることが多かった。そうした学習を通して，何かをしなければといった意識をもち行動しようとするきっかけはできても，地球規模の問題を自分事としてとらえて，何かをしていこうという気持ちを持続させることは難しい。そのため，自分たちは恵まれているけど途上国に暮らす人はかわいそうという気持ちから生まれる一方的な支援から脱却することはできない。一方的な支援，かわいそうからの転換を図るためには，自分の身の回りのローカルな学びと，世界の現状について学ぶ，グローバルな学びを結び付けることが重要で，さらに，グローバルな学びについては，インターネットで調べた情報ではなく，それぞれの地域の子どもたちが学んでわかったこと，感じたことを自分たちの言葉や歌などを通して互いに紹介し合う活動，すなわち相手の顔が見える交流活動としての協働的な学びを取り入れることが有効である。同じトピックでローカルな課題について学んだ子どもたちから，一人ひとりの気付きや思いを引き出し，それを子ども自身の言葉（つぶやき）や絵，身体の動き（身体表現），歌などで，気付きや思い・願いなどを表現させる活動を組み込んで，それを伝えあうようにすることによって，受け取った子どもたちは，地球規模の課題についても伝えている相手が見え，人とのつながりを感じながら知識を得ることができ，さらにその知識を自ら学んだローカルな問題と結び付けて考えることができる。こうした活動によって，グローバルな課題は，自分とは関係のないものではなく，実は自分たちの身の回りの課題と密接に結びついていることに気づき，一方的な支援やかわいそうという意識ではなく，他国の出来事でも自分事としてとらえることができる。さらに，他国の子どもとの協働的な学びの中で相手の考えを聞き自分の考えや思いを伝えて，共に課題解決に向けて協調して取り組むことによって，地球規模の課題解決のために同じ地球に住む一員としての自覚が芽生え，グローバルシティズンシップの育成にもつながるのである。

・"水"を共通テーマに、地球上の各大陸・地域から出てきた課題を具体的に話し合い、各国でそれぞれ学び合った
・ 学び合ったことを歌や踊り、ミュージカルなど多様な表現活動を通して伝え合い、水・気候変動問題解決に向けて発信した
・ 水をテーマにした音楽「I Love Water」を専門家（椙山女学園大学の渡邊康先生）に創作してもらい、できあがった歌を、ブルキナファソのル・クルーゼ学園、フランスのアルザスの学校、そして蓮末小学校の子どもたちがそれぞれ歌い、思いを伝え合った

図 1．水をテーマにした教育プログラム

② 教育プログラムの独自な開発

これまで大陸間 SDGs 教育プロジェクトでは，独自の教育プログラムとして，図 1 のように，グローバルイシューである“水”をテーマに，ローカルな水問題から地球規模の水問題に至るまで，大陸を越えてアフリカ，ヨーロッパの子どもたちと直接交流しながら，地球規模の問題を協働的に学ぶ教育プログラムを開発し，各国の子どもが同じテーマでそれぞれが学び，学んだことを音楽や，踊り，ミュージカル，紙芝居，影絵，ジオラマで表現して発表するという活動を行う実践を行ってきた。

3. 大陸間交流活動における言語と多様なメソッドの開発

(1) 大陸間交流における言語とコミュニケーション

二国間の国際交流は，異文化理解，開発途上国支援，国際性育成等，様々な形で実施されている。大陸間交流は，地球の大陸ごとの交流により地球の多様性と同時に，地球全体の共通課題を知り，問題解決を共に目指すものである。また，一気にグローバルな意識形成を目指すのではなく，ローカル・ナショナル・グローバルの間に，リージョナルな意識と問題解決の行動を生み出そうとするものである。そこには，プロジェクト運営主体と支援する側，支援される側，そして，この両者を結び付ける介在者，具体的な運営での協力者がいる。一般的な募金活動では，ユニセフ等が介在者となり，支援される側は世界中の困っている子どもたちで，学校は支援する側であり，ユニセフ等への協力者ともいえる。

モノの直接的支援の東京白金のケースでは，運営主体と支援する側は白金志田町倶楽部の店舗で，支援される側はブルキナファソ，介在者は日本ブルキナファソ友好協会で，現地に文房具を贈呈した。椙山のケースは，運営主体と支援する側は椙山女学園大学附属小学校であり，支援される側はブルキナファソ・バンフォーラ市の学校である。介在者は日本大使館であった。この協力者が商船三井等である。

この第 1 ステージでは，モノが支援される側に到着し，支援する側の国際意識が形成されることが重要で，現地とのコミュニケーションは介在者に任されている。ただ，「かわいそうだから」の発想を脱皮しようと，白金では，子どもたちへの国際教育を東京大学の講義で，週 1 回東京に通っていた宇土に依頼があり，子どもたちへの国際理解教育を実施した。そして，世界銀行のテレビ会議システムを使った「地球授業」を2009年 3 月に実施し，両国の交流を図った。椙小でも，元青年海外協力隊員による現地理解授業，駐日ブルキナファソ代理大使への贈呈式，商船三井からの映像をもとに「椙ニコちゃんの旅」の教材作成，杉浦ブルキナファソ日本大使の現地報告会を行った。

間接的支援の教育重視の第２ステージでは，一方向の支援から双方向の交流が必要で，大陸間教育では，自らの地域や地球的課題を探究し，提示し合い，課題解決への学び合いを実施するのである。

当初，椙小では，オーストラリアとの交流を Skype で実施した。事前に練習した英語の自己紹介や日本紹介はできたが，発展的な交流にはならなかった。また，パースの小学校とホームステイ交流を実施してきたが，なかなか学び合いまで進むものではなかった。そこで，水問題を共通テーマとし，オーストラリアの水問題を学習し，現地では，エクスカーションプログラムとして一緒のバスでダム見学を行った。そこでは，森を守るパークレンジャーがダムや森を案内すると同時に森の中に大きなジオラマが置いてあり，ダムと森の関係，雨の影響，水汚染などを通して，森の大切さを学ぶ指導が行われた。これは，日本の子どもたちにもわかりやすく，翌日の授業でも共に学べるものとなった。大陸を越えた学び合いには言語の壁があるが，ジオラマは様々な要因をつなげて考えることを促進し，さらに言語コードを逓減しているので，母語話者でなくても理解しやすく，共に学べるのである。言語コードの逓減は，言語の異なる子どもたちが相互に理解し合うために，具体的なモノや映像，ジェスチャーなどのボディランゲージを介して学び合うことによって，言葉がわからなくても，何を意味しているか，何を指しているかがわかるために，理解とコミュニケーションが進みやすくなる。そのために，大陸間 SDGs 教育プロジェクトにおいても，多様なメソッドを教育重視のステージの中で各国が研究してきた。

その成果が，2019年度のパリ公演で出てきた。そこでは，共通な SDGs の中の水・気候変動のテーマを各国の抱える問題と関わりながら，実施してきた。フランスは，影絵を使いながら，環境問題を中心に，海洋汚染，都市の排気ガスの問題などを訴えた。ブルキナファソは，音楽と劇で，水問題やごみ問題を訴えた。マンガにも注目していた。日本は，ミュージカルで訴えたのである。

⑵　大陸間教育における態度形成と４つの側面論

大陸間 SDGs 教育プロジェクトにおいて，言語とコミュニケーションの問題と同時に，地域や地球的課題への問題解決を目指そうとする態度形成が求められている。自分事化とつながる課題でもある。新学習指導要領においても，知識習得の学習から生き方・態度形成の学びへと明確に転換している。このような教育の具体的なカリキュラム開発において，大陸間教育では，当初から４つの側面論を用いて実施している。この４つの側面論は，1990年の宇宙船地球号プログラムにおいて導入したもので，以下の４つの側面からなる。

１）情意：興味関心の喚起，自由な気づき，比ゆ的な面白さ，対象への関わりの気持ちなど

２）認知：気づき，発見，子どもの応答を活かした知識づくり，そこからの発見など

３）価値：自分と他者にとっての大切さ，自然，風景，そして地球の大切さなど

４）技能・行為：気づきや大切さを自分たちでやってみようとする態度，工夫など

従来，態度形成は，情意・認知・行動の３つの要素で構成されているが，子どもの態度形成においては，まだ，価値や技能について学び，習得している途中であり，この４つの構成要素から考えた方が適切であると考えたからである。大陸間 SDGs 教育プロジェクトの日本側の実践であり，宇土ゼミの学生が中心になって活動した岡崎市立生平小学校への出前授業においても，この４つの側面論を用いて，プログラムを創り出した。１年目（2017年度）は，アサヒ飲料㈱と協働して「水と森の物語」のプログラムを作った。

情意的側面：「えこるん」と「にこるん」のファンタジーによる水の物語

認知的側面：ろ過装置での科学的認知・体験的理解，外国の現地映像による世界への認知的拡大

価値的側面：世界の水の使用量と自分の水の使用量との視覚的な比較と自らへの問い

技能的側面：すごろくに描かれている水への態度や技能をゲームにより学ぶ

２年目（2018年度）は，１年目の平常時に対して気候変動による異常気象を題材にした「日本と世界の異常気象の物語」である。熱による対流と土砂崩れ実験を取り入れ，価値的側面では四つのコーナーを，技能的側面ではすごろくにより，異常気象時の行動の仕方や判断を題材にしている。

３年目（2019年度）は，個人の行為と地球システムの相互関係を課題にして，「100年後の地球の物語」を行った。個人や地域での活動が，地球全体に影響し，地球システム自体が気候危機として出現し，今度は地域や個人に対して，大洪水や異常気象として現れるという危機の循環である。情意的側面ではクロマキー手法と寸劇による「100年後の地球の物語」について，認知的側面では水の実験を観察，価値的側面では，道徳「地球を救おう子ども会議」の資料を基にグループで話し合った。技能的側面では，「100年後に届け！生平小2020年の木」と題して SDGs スゴロクをもとに学びあい，2020年の木に自分の宣言を掲示するという授業を行った。

現在，オンライン化に対応したジオラマで学ぶ年少者用宇宙船地球号プログラム開発を行っており，そこでも，１）ジオラマとの出会い（情意的側面），２）ジオラマでの旅（認知的側面），３）ジオラマの探検（価値的側面），４）ジオラマの仲間との連帯（技能的側面）をもとに，台本を作成し，動画作成を行っている。

⑶　オンラインを使った交流へ　フィリピンモデル

①　フィリピンの現在の活動

フィリピン社会では貧富の格差が広がり都市の貧困や農村地域など，多くの人々が貧困に苦しんでいる。フィリピンの抱える問題も多く，特に貧困は開発途上国において解決しなければならない課題である。その課題解決に向けて支援を行っている RISEASIA は，日本とフィリピンの交流や支援活動を推進し「アジアの豊かな社会の実現」を目的とした国際協力をする NGO である。RISEASIA では，1）フィリピンのマニラ市トンド地区での活動，スモーキーマウンテンは首都マニラのゴミ集積場跡地で，貧困層が住む地域であることは変わらない。サンディワアン保育園は，その地域の 3 ～ 5 歳児の園児に教育支援，バランスのとれた給食の提供や，公立小学校に行く子どもに奨学金を支給している。サンディワアン学習センターでは，学校を修了できなかった青年に対して，ALS 教育（代替学習制度）の機会を提供している。2）首都マニラ貧困地域に位置する公立小学校のラクソン小学校，マガット・サラマット小学校での交流支援では日本の小学校と異文化交流体験授業を行っている。3）ダバオ市マリロッグ町にある公立ダト・ロンピピ小中学校の支援，この地域は，先住民アタマノボ族，マティサログ族が暮らす村がある。地理的，環境的な条件の厳しい山間部に居住しており，経済発展はもとより，教育や保健といった公共サービスへのアクセスも非常に限定的なことから，学校建設と水道設備を寄贈するなどの支援を行っている。フィリピンでの貧困層に属する彼らの生活環境を改善させるための支援活動を行っている。これらの活動は，貧困に苦しむ人々を教育，保健，栄養改善，環境保全を通じて能力を高め自立することを目的としている。

②　フィリピンと日本の Zoom 活動による交流

コロナ禍，オンラインを利用してフィリピンと研究会を行った。マガット・サラマット小学校は，フィリピン教育教材開発としてジオラマを製作する計画が発表され，マガット・サラマット小学校の児童による各テーマのジオラマが製作された。また，椙山の環境と人間プロジェクトの研究室にあるジオラマの紹介をして，ジオラマの活用法など発表が行われた。フィリピンの NGO 代表ベニグノ・ベルトラン神父より 4 回の発表があった。

1）フィリピン持続可能性の課題―持続可能な開発目標を達成するための戦略 第 4 次産業革命に照らして―
2）教育をテーマとした「サンディワアン学習センターの実践/ALS 教育（代替学習制度）」
3）環境をテーマとした「地球を傷つけることは，グローバルなエココミュニティ実現に向けて自ら傷つけること」
4）経済をテーマとした「デジタル化時代の労働力変革に向けた 10 の原則」

フィリピンからの発表は，NGO 活動を通じて，各分野で必要な事業内容と経過を SDGs の目標に沿ってフィリピンがここまで至った道のり，現在の状況と問題点などの指導を受けながら勉強することができた。

4. 大陸間交流活動の可視化と計画づくり

⑴　言語の視点から見たカリキュラム開発

日本以外でも多くの人は学校で平均10年近く英語を学んでいる。しかし，日本の学校で英語を学んだ人に，英会話力についてのアンケート調査を行ったところ，「英語を聞くことも話すことも問題なくできる」と回答した人は，わずか 2.5％に留まった。このような事態に対して，どういう風にしたら効果的に楽しく学べるかということをハウツーとして開発してきたメソッドが Educational Visualization System（EVS：学習状況表示用画像）である。これは，年齢や言葉の違いにかかわらず使うことのでき，子どもたちの教育にも応用できるシステムである。

①　EVS の図表の説明

この EVS は，語学，数学，その他の課題の学習状況を表示するための図表で，左側の縦フレームは，学習すべき複数の項目を表示するためのものであり，上部の横フレームは生徒の習得レベルを表示するためのものである（図 2）。

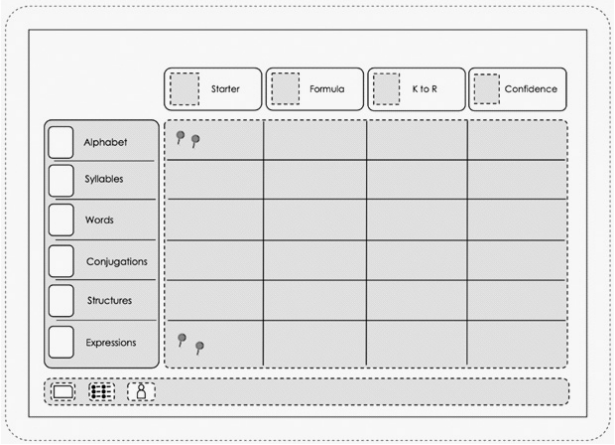

図 2．EVS（Educational Visualization System：学習状況表示用画像）

②　縦フレーム・英語の基本的な流れ

縦フレームは，子どもが英語など学ぶ内容の発展構造を分かりやすく示した項目である。算数や社会や総合的な学習など学ぶ内容によって変わるが，その科目や活動の持つ論理的なカリキュラムの流れを表示する。

1）アルファベット：母音と子音の存在から区別まで又は独特な使い方を意識するステージ
2）音節：母音と子音の合体で英語の音節の発音を学ぶ
3）語彙：音節の組み合わせで言葉を学び, 種類で整理をし, 種類の違いを理解する
4）活用：言葉の種類によってどれが活用するかしないか,

どう変化するかを実感する

5）文章の構造：主語，動詞，目的語等によって言葉の組み合わせを覚え，文章作成力を身につける

6）表現：自らの力で作れる英語から一般的な表現とネイティブの独特な表現を身につける

③　横フレーム・習得レベル

横フレームは，生徒の習得レベルに関わる学ぶプロセス・流れを表示しており，４ステップに分ける。

1）STARTER（イメージ獲得）：このステージでは EVS につながる教科をビジュアル化し紹介する。漫画やアニメーションなどのキャラクターを使い，アルファベットから始まる縦フレームにあるカテゴリーを用いてそれぞれのつながりを発見させていく。生徒は英語の世界の中にいる主人公となり，自分のペースで理解し体験することによって，言葉の世界のルールなどを発見していくことができる。

2）FORMULA（技の習得）：このステージでは，STARTER で発見できた英語における言葉の種類，文法の構造などの工夫や使い方を自分で使って練習する。その部分の関係とカリキュラムの流れを理解することで一番効果的なラーニングメソッドを身につけることができる。

3）K to R（Knowledge to Reality 知識の実践的使用）：このステージは，スキルが身についた生徒の知識をプロジェクトや活動で活かすためのステップである。このスキルをプロジェクトや活動を通してビジュアル化させたり，形にしたりすることで，知識を現実世界での知恵に変化させることができる。

4）CONFIDENCE（自信の獲得）：英語の世界の構造と言葉の繋がりを習得し，知恵を身につけた上で，効果的に言葉の表現方法を他人と共有したり，適切に伝えたりする事ができるまでに成長する。

④　メイン表示部・学習状況

中央のメイン表示部は，縦フレームに表示される各項目と横フレームに表示される各習得レベルに対応した一定のステップに，生徒のレベル，目標，達成状況等を文字や画像によって表示するものである。

⑵　大陸間交流活動の可視化と今後の課題

EVS は，英語習得の可視化だけではなく，語学，数学，社会などにおいても使用できるシステムになっており，EVS の縦フレームは，教科等の基本的な流れを示し横フレームは何れも４ステップを使用する。大陸間 SDGs 教育プロジェクトでも，EVS をジオラマのカリキュラム開発に応用してみると，活動の評価と可視化ができ，今後の活動の課題が見えてくることがわかった。そこで，EVS の一般化として，ジオラマプログラムの４つの側面論と融合して，活動の流れを側面論（横フレーム）とジオラマプログラムの流れ（縦フレーム）を元にしてジオラマ版の EVS を作ることにした（図３）。

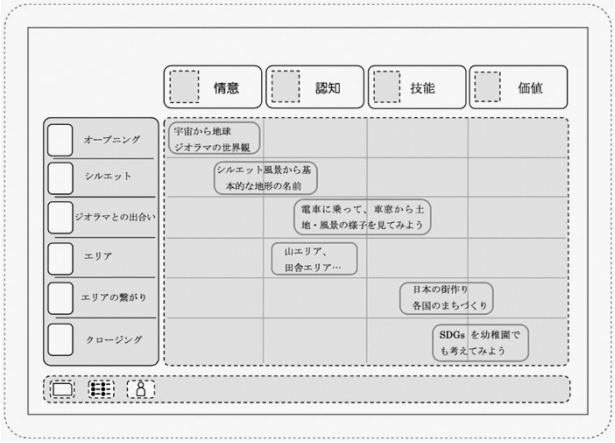

図３．ジオラマ版の EVS

ジオラマを体験している幼児の行動を EVS でイメージできて，カリキュラムの中でどこの位置（進み具合）に居ることと，情意，認知，技能や価値の側面において，どのような内容の活動を優先すべきなど分かり，価値的側面の学びの場づくりをさらに深めることになった。

まとめ　大陸間交流の拡大と多文化共生

これからの国際理解教育に求められているものは，平和と人権尊重の心を基盤として，人類と地球の未来に向かって立ち向かうことができる力の育成である。新学習指導要領では，持続可能な社会の担い手を育成することを求めており，そのためには，地球規模の課題について一人一人が差別や偏見をもたずに，互いの人権を尊重しあい，同じ地球に住む一員として協働して解決に向けて取り組むことができる力を育成することが必要で，その前提となる多文化共生の心を育む必要がある。

愛知県，名古屋市には，日本語指導が必要な外国人児童生徒が全国で最も多く在籍しており，教室の中の環境がまさに多文化共生の空間となっている。その利点を生かして，常に教室の中の空間が，国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的な差異を認め合い，対等な関係を築きながらともにしあわせに生きていくことができる環境となるように配慮していく必要があり，その実践が求められている。しかし，教育に携わる者として，外国人児童生徒には様々な壁があり，特に高校進学については教育制度の壁によって進路を阻まれてしまい，自分のキャリアを描きづらくなっている現状にも目を向けなければならない。この大陸間 SDGs 教育実践プロジェクトでは，そうしたことにも配慮しながら，これまで交流活動を通して多様なメソッドの開発と可視化に取り組んできた大陸間交流の拡大と並行して，今後，多文化共生の教育を同時に進めていくように努め，地球時代の国際理解教育の実践の在り方を探っていきたい。